

OMEPP世界大会（アリゾナ大会）に

参加して

小川 清実

昨年の一九九二年八月三日から六日まで、三年に一度、開催されるOMEPP（世界幼児教育機構）第二十回世界大会が、アメリカのフラッグスタッフにある北アリゾナ大学で行われました。

OMEPPと私との関わりは、以前、OMEPPの活動のプロジェクトの一つである「子どもの伝承遊び」についての共同研究に参加して以来のことですが、私自身、世界大会に直接、参加したのは、アリゾナでの大会がはじ

めてのことでした。これまで何回か、外国への旅の経験はあったのですが、アメリカというところを訪れるのは、私にとって、やはりはじめての体験でした。その上、今回の旅には、私の小学校五年生と六年生の二人の娘をつれて出かけるという、これもまた初体験ということになったのです。子どもたちにとっては、外国に出かけることはもちろんはじめてということだけではなく、飛行機に乗るのも、はじめてという、「はじめて」だら

けの旅になりました。

実際に世界大会に参加すると決めたものの、フラッグスタッフという場所が、アメリカのどこにあるのか、どのような町の様子なのかを知る機会が、あまりないままに、出発することになってしまいました。日本に残していく、家族やペットへの配慮や手配をしているうちに出発日が来てしまったというのが本当のところですね。同業者の夫は、夏休みとはいえないものの、日本の中を、仕事で飛び回る日々を過ごすことがわかっていましたので、老人性痴呆症の夫の母親は、時々お世話になっている、特別養護老人ホームで預かっていただくことが決まり、犬も、獣医さんのところでお世話になることが決まったのは、七月末日でした。そして、八月二日に成田を出発したわけです。

OMEPP世界大会に参加すると決めた時に、毎回世界大会に参加されているOMEPP日本委員会理事の大戸美也子先生から、プログラムをお借りして、内容がどのようなものなのかを見せていただきました。アリゾナから

のプログラムには、一九九二年八月二日から八月七日までの六日間という長い期間に様々な催しが用意されているのを知り、正直なところ驚いてしまいました。日本の学会などでは、六日間という長さは考えられないことです。OMEPP世界大会では、基調講演や研究発表だけではなく、特別なイベントもいくつか計画されていて、プログラムを見ただけでは、どのような会であるのか、全く予測できないものでした。日本からはOMEPP世界大会参加のためのバック旅行が企画されたので、子ども連れの私としては、安心して参加することができました。

フェニックスへ

フラッグスタッフには、直接飛行機で行くことはできません。そのためにフェニックスまで飛行機で行き、そのあとは、バスなどの車で北に上るのです。今回の世界大会では、まずフェニックスが集合場所となりました。

飛行場のあるフェニックスの隣りのメサ市で、世界大会に先がけて、八月二日の夜にメサのハード美術館で夕食会が催されることになっていたので。

そこで、日本時間八月二日午後六時すぎに成田を出発し、約九時間後、アメリカ時間八月二日昼頃にサンフランシスコに到着し、国内線に乗り換えて、さらに二時間。フェニックスに着いたのは、午後三時すぎでした。

私は、前日、成田に着いたのと同じくらいの時間にアメリカのフェニックスにいますという感覚がしっかりと把握できずにいたことと、八月にしては比較的涼しかった東京から、一気に気温四十三度という猛暑のフェニックスにきてしまった。その肉体的なショックでしばらく茫然とした思いをしたことを憶えています。

一方、健康に恵まれた娘たちは、飛行機の中で、何回かのスチュワーデスとの“*What do you drink?*”のやりとりにもすっかり慣れ、自分の口に最も合う飲みものを見つけて出していました。離れ離れにすわらなければならなかった、アメリカ国内線の中でも堂々と“*Seven*

up, please.”とやっていたのには、親として頼もしい思いをしたものです。そして体温をはるかに越えたフェニックスに着いても元氣そのもの、時差など関係がない様子でした。

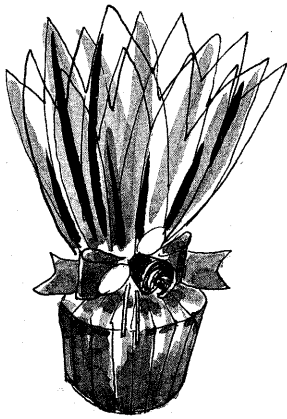
ホテルに荷物を置き、着換えもそこそこにバスでメサの美術館に向かいました。美術館で、OME P世界大会に参加するメンバーの交流を図るための夕食会が催されたのです。ハード美術館の中庭で、冷たいレモネードが用意されており、夜になっても相変わらず、気温四十度というような暑さの中、のどを潤しながら、展示を見たりして過ごしました。このハード美術館で立食パーティーが催されたことから、私には、アリゾナで行われる世界大会のスタッフの、ある意志が伝わってきた思いがしました。なぜなら、この美術館は、アメリカ大陸の先住民族である、インディアンと呼ばれる様々な部族の歴史や文化を紹介しているところであり、私たちに提供された食物は、先住民の人々の、米を中心とした典型的な食事だったのです。茶色っぽい、ピラフのような「こは

ん」は、とてもなつかしい香りがして、とてもおいしいものでした。

アメリカというと、すぐに白人や黒人やあるいはアジア系の人々を思い浮かべるのですが、アリゾナにはたくさんインディアン居留地がある所なのだという事に気づかされたのでした。白人でも黒人でもない、先住民族（インディアン）の人々に、私は大変安心感と親近感を覚えました。何時間もかけて、アメリカという外国に來たはずなのに、緊張感もなくなり、妙に落ち着いてしまい、日本語で話しかけたら、日本語で答えてくれるような気分になってしまいました。娘たちは、美術館で、織物や細工を実践して見せて下さっているインディアンの女性から、実際に織物を肩にかけてもらい、踊りを教えてもらったりしたのでした。娘たちは、アメリカインディアンの子どもといっても全く異和感がないくらいでした。私は、アメリカの先住民族（インディアン）の人々の存在を、ここに来るまで忘れていたことに気づきました。そして、この場所で、夕食会に参加できて、と

てもよかったと思ったのです。

夜、八時頃から下の娘が立ちながら眠り出してしまいました。中庭に面したベンチで寝かせていたところ、ア



リゾナ大会のスタッフの一人が、素早く見つけて下さって、冷房のよくぎいた快適な部屋に案内して下さいました。あまりの暑さに頭痛を訴え、気分が悪くなった方達も次々と案内され、長椅子で休養されていました。

このようなときの適切で親切な対応の様子には本当に感激しました。今回のアリゾナ大会は会場として急に変更して決まったために様々な予定変更があったのですが、スタッフの人々はそのときそのときを、全力を注いでやって下さったのだと思います。このときお世話になったスタッフの方から、下の娘は“Sleeping girl”と大会開催中、呼ばれ、とてもかわいがって下さったのでした。

フラッグスタッフへ

フラッグスタッフは、フェニックスから約二百キロ北にある町です。そして標高約二千メートルという高地です。気温四十度以上というフェニックスから、標高二千

メートルのフラッグスタッフまで、バスでだんだんと登っていくのでした。気温がぐんぐん下がり、フラッグスタッフに着いた時には厚めの上着が必要なほどでした。

北アリゾナ大学があるフラッグスタッフは高地であるために、涼しく、陽差しは明るく、白樺がとてもきれいな、さわやかな気候でした。フラッグスタッフの町は車でグランドキャニオン観光をする拠点となっているので、たくさんドライブ・インがあり、ルート・六十六（十六号線）という道路沿いに町がひろがっている感じでした。

世界大会が行われた北アリゾナ大学の広さには目を見張りました。学生達は車や自転車で構内を移動しているようでした。かなり傷んだ車もありました。大学構内の道路は、車と自転車と人というように三種類にわけてありました。自転車で猛スピードを出している人も見かけました。なにしろ、建物から建物に移動するのに、歩いて二、三十分が普通なのです。大会開催中は、スタッフ

の人々によって、十五分間隔で構内の主な道路をシャトルバスが動いていました。このバスに乗れた時には本当にほっとしたものです。学内は案内図を片手に持つて歩いてたのですが、それでも迷ってしまい、自分が行きたい建物になかなか到着しないことも多くありました。

そのたびに歩いている学生に尋ねたりしました。どの学生も皆、とても親切に、丁寧に教えてくれたことはうれしいことでした。ふと日本の学生だったらどうだろうという思いも浮かんだりしました。幸い娘たちは私よりずっとはやく学内の地理をマスターしてしまっただので、娘たちが案内役となり、私は素直にそれに従っていくことになりました。このようなことは、日本にいたら、絶対に考えられないことです。この娘たちの成長を心強く思いながら、広い広い北アリゾナ大学(NAU)で、八月三日から六日の四日間を過ごしたのです。

世界大会

OME P世界大会は、大会ごとにテーマが掲げられています。アリゾナの大会においては、「すべての子どもたちのために働こう―子どもたちの生存、保護と発達のために」というテーマでした。そのテーマのもとに五つの柱がたてられていました。

一 発達と学習

二 家族、コミュニティーそして社会的サービス

三 健康、栄養と環境

四 ことばと識字能力

五 異文化間交流と国際化

これらの柱のもとに、各国の専門の立場から、基調講演、そして分科会、さらには場所をかえて、英語、フランス語、スペイン語による討論が行われました。そして同時に、テーマに基づいた個人の研究発表が行われたのです。OME P日本委員会事務局によりますと、このアリゾナ大会には世界三十八か国から四八七名の参加があったということです。これらのテーマについての細かい報告はいずれ文書の形で出されることになっています

ので、私が今回、初めて参加してみてもの印象を記してみようと思います。

八月二日の夜の世界大会の前夜祭のような夕食会が催されたのを皮切りに、八月三日には受付、そして夜七時半すぎから、北アリゾナ大学（NAU）の「講堂」というような風格の建物で開会式が行われました。開会式は、ナヴァホ族の青年による静かな祈りの儀式から始まりました。この祈りの儀式で、やはりNAUがあるこの地域の特徴が明確になったと思いました。ひき続き、OMEPP総裁、NAU学長、フラッグスタッフの市長、OMEPPアメリカ委員会会長の挨拶がありました。どの方々もにやかで本当に私たちを歓迎して下さっているような印象を持ちました。そしてさっそくメキシコ文部省のある教授が基調講演をなさいました。

実はこの開会式には、まだ同時通訳の設備が全く準備されていなかったのです。そのために英語でのスピーチはなんとか理解しようと努力しましたが、スペイン語での講演は全くわからず、忍耐のみで過ごしました。こう

して二時間以上の開会式を終え、続いてOMEPP総裁主催のレセプションが二十分近く歩いたNAUの体育館で行われました。レセプションでは、冷たいレモネードと種々のドーナッツがサーブされました。温かなドーナッツが次から次へと出てきて、レセプションといった、日本のイメージからはかけ離れていましたが、スタッフの手作りの温かさを感じました。体育館では各国のパネルや写真をつかった展示が行われており、また教材など、子どもの関係の様々な展示、販売が行われていましたので、ドーナッツを食べながら見て歩き、夜十一時近くにやっとホテルにもどりました。このようなハードスケジュールは翌日もそのまた翌日も続いたのでした。

八月四日から六日の三日間は主としてテーマと柱にそって、基調講演、分科会、そして討論会が朝八時三十分から夕方五時三十分まで行われました。同時に個人の研究発表も行われていました。十時と四時には各会場にコーヒーや果物が用意され、ちょっと一息というところ

ろです。昼食は一時間十五分という時間が設けられていました。食卓まで、片道二十分以上かかってしまうので、午後の会に間に合うためには、大いそぎで済まさないければなりません。その上、夜には毎日、特別のイベントが用意されていました。

これらの毎日のプログラムをすべて消化することは到底無理なことでした。娘たちを連れていましたので、私にとっても娘たちにとってもあまり無理のない、参加の方法をとることにしました。アメリカでは十五歳以下の子どもは、親の目の届くところにいるように義務づけられているので、子どもだけを自由にさせることができません。そこで日本語の同時通訳が入っている特定の会場の、午前中の講演や分科会を聞くことにし、ゆっくりと食堂で昼食をとり、午後はNAUの生協や本屋を見たり、大学の構内を散策したりして過ごすことにしました。また、フラッグスタッフの町にも出て行ったりもしてみました。そして、毎晩、特別のイベントには参加したのです。まず、八月四日の夜には「メキシコ祭り」が

大会スタッフの人々と一緒に



体育館で催されました。メキシコ料理とメキシコ音楽を楽しみました。誰からともなく踊り出し、その踊りは本当に果てしなく続きました。すぐ南にあるメキシコは、とても近い存在のようでした。次から次へと演奏されるのを、皆、大喜びで踊り、楽しんでいました。踊りの輪は、参加した様々な国の人々で一体になった感じでした。次の八月五日の夜にはホピ族の踊りを見たり、皆で歌やゲームをしたりした“World Festival”がありました。アメリカの黒人の女性（宣教師ということでした）が一人で皆をリードし、楽しいひとときを過ごしたのでした。ここでも参加した国々の人々が一つになったような感じがしました。その後レセプションとバザーがありました。バザーでは各国の参加者が持ちよった品物が販売されました。深夜まで続いていたのですが、私は娘たちと途中でホテルに帰りました。本当に参加者の体力の強さとバイタリティーには参りました。

こうして最終日の八月六日の夜には、「閉会式」が行われました。まず、四日間の講演や分科会で話されたこ

とを整理し、まとめたものが、この地方特有の、人が立っているような形をしたサボテンの図に記入しながらの報告が主なものでした。そして今回の閉会式では重要な事柄が二つありました。一つはこれまでのノルウェーのバルケ総裁が任期切れのために、カナダのピノー女史に変わることに、そしてもう一つは次の一九九五年に行われる第二十一回世界大会が、日本の横浜で行われることが正式に発表されたのでした。日本のOME P国内委員会の理事であり、コーディネーターの津守真先生が、しっかりとOME Pの旗を受け取られました。

これで二日の晩からはじまったOME P世界大会アフリカ大会は終わりました。私が参加した分科会では、南アフリカ共和国の差別されている子どもたちの状況が報告されたり、WHOのマジニ博士がエイズにかかっている子どもとどのように付き合うのかを子どもたちに伝えていくのが大切であることを強調されたりしていることが強く残っています。世界中のあらゆる国が、それぞれの問題や課題を抱えながら、子どもたちと真正面から取

り組んでいる様々な人々の存在があらためて認識できたように思います。子どものことについて研究する研究者だけではなく、政府の役人も病気の子どもへの世話をする医者や看護婦も、そしてもちろん保母や教師たちも、子どもに関わっているすべての人々が、自分の国の子どもにだけ関心をよせるのではなく、世界的に様々な状況におかれている子どもたちに関心をもち、できることならば不幸な子どもたちに手をさしのべるといふ行為を実行していかなければいけないのだという思いを新たにしました。

大会後

世界大会後は、バスでの長距離旅行となりました。アメリカに住んでいる人でもめつたに行くことのないモニュメント・バレーを訪れ、雄大なグランドキャニオンで美しい日没を見たりという、いそがしい観光旅行ではできない体験をすることができました。

娘たちは、この旅でぐんと成長したようです。娘たちなりに、自分で買物をしたりして冒険し、自信をつけたようでした。アメリカの人々は、ほとんどが子どもと目が合うと、にこっと笑ってくれました。娘たちが買物のときに、コインと格闘していると、店員はうしろに人が並んでいても、にこにここと「子どもにとっては、とってもいいことよ」と言って待っていてくれ、うしろの客も同じように待っていてくれる態度は、とてもありがたく思いました。娘たちはアメリカの人々の温かさに触れたことで、アメリカが大好きになったようです。

はじめてのアメリカへの旅は、私たち母娘三人にとって、意味のある、素晴らしい体験となりました。

(埼玉純真女子短期大学)